

ミルトンの教育観

杉本 誠

(1)

ミルトンが1644年6月発行の『教育論』*Of Education*において、彼の教育観が明らかにされている。従来、ミルトンの『教育論』がクリスチャン・ヒューマニズムに基づく教育改革であることは、デイシスによって「彼の教育の究極の目的は、クリスチャン・ヒューマニストの教育である」⁽¹⁾と述べられていることや、ハンフォードも「ミルトンの教育の思慮深い経験の結実であり、ヒューマニスティックな教育課程を代表している」⁽²⁾と論じている点、さらにブッシュの意見によれば、「ミルトンはこの世において神を模倣し、道徳的判断の正しい意志の訓練を成し、人間の靈的威厳さ“spiritual dignity”を高揚するためには、教育のヒューマニスティックな体系を生み出さなければならなかった」⁽³⁾と主張していることなどからして明らかである。ミルトン自身、『教育論』において彼の教育に関する見解と目的とを明らかにしているが、まず学問の目的に関してクリスチャン・ヒューマニストの立場から、次のように述べている。

学問の目的は、神を正しく知る力を回復することにより、われわれの始祖の墮落を修復することであり、この知識を通して神を愛し、模倣し、われわれの魂に神の恵みに結びつくことによって最高の完成を成し遂げる信仰という真の美德を備えることにより、できるだけ神に似る存在になることである⁽⁴⁾。

これは学問の目的が靈的な働きを重視するという「キリスト教的教育観」といえるものである。教育や知識の究極の目標は、神への奉仕におかれるのであり、学問と信仰に関わるミルトンの思想の完全に結合された姿がここに見られる。『教会統治の理由』*The Reason of Church-Government* (1642年)においても「宗教についての真実の知識と倫理上の徳—この二つは学問の最良にして最大の要点である」⁽⁵⁾という言葉の中に、ミルトンのキリスト教の見解にとって、知識と叡知に関わる教育の重要性が明確に示されている。

また、ミルトンは教育の目的とするところを次のように述べている。

従って私は、私的にも公的にも、平和と戦争に関するあらゆる職務を正しく、巧みに、高潔な態度でやり遂げる人物を形成する教育こそ、完全な、気高い教育であると呼びます⁽⁶⁾。

教育の目的をアリストテレスの言う「心の高潔さ」⁽⁷⁾をもつ良きジェントルマンの育成という点に絞ったこの定義は、いわば「古典的教育観」ということができる。ミルトンの学問の目的と教育の目的は、ちょうどジョン・コレットの教育思想にみられるキリスト教とヒューマニズムの融合⁽⁸⁾のように、「キリスト教的教育観」と「古典的教育観」の融合とみることができる。かつてエインズワスは、ミルトンの教育観を「ヘブライ的教育観」と「ギリシア的教育観」の総合のうえに成立することを認めた⁽⁹⁾。また、17世紀の教育思想のすぐれた研究者であるグリーンズも、ミルトンの教育観に「古典的人文主義の理念とピューリタニズムの原理との注意深い融合」⁽¹⁰⁾を認めている。ただここで注意したいことは、ミルトンの教育観においてはヒロイックな人格の形成を教育の最終目標としていた点である。

(2)

ところで、ミルトンの『教育論』が出された背景には、17世紀のイギリスにおいて学問および教育の面で、キケロ主義と呼ばれる新スコラ主義が大学、学校に広まり、ベイコンの合理的な合理、経験の実証精神よりも、アリストテレスとトマス・アクィナスの教理が復活され、教育においては論理学、文法および修辞学が比重を占めるようになったという背景がある。こうした状況の中で、ミルトンは自らが育った聖ポール学校のヒューマニズムおよびケンブリッジ大学の新プラトン主義の思想教養を堅持し、さらに合理、経験の実証主義の重要性をも認識していたのである。だから彼は当時の学問および教育については、かなり批判的であり、教育方法の改善を提案したのである。ミルトンは『教育論』の中で、まず言語の問題に触れ、「有用な事がらをわれわれに伝える道具」⁽¹¹⁾にすぎないところの言葉、とくにラテン語とギリシア語を習得するのに七年も八年もかかっているという惨めさは、方法を変えれば「一年間で容易に楽しく習得できる」⁽¹²⁾ことを主張している。すなわち、ラテン語やギリシア語の文章を丸暗記させたり、これをまねて詩や作文を書かせるというやり方ではなく、まず文法を正しく教えると同時にその正確な発音を教えることが必要であるという教育方法の改善を指摘しているのである。ついで、論理学や形而上学といった「最も知性を必要とし、かつ抽象的なものを初心者に与えている」⁽¹³⁾教育を批判し、これは「スコラ学派の詰め込み教育から回復していない証拠である」⁽¹⁴⁾と論じる。従ってこのような状態であれば、せっかく価値あり心楽しませる知識を期待しても、たいていは学問に嫌気がさし、軽蔑するようになることを警告する。このように、「最もやさしい学芸、感覚に最も訴える具体的なものから出発するのではなく」⁽¹⁵⁾抽象的思弁から教育を始めるというスコラの愚行を改

め、具体から抽象的観念へと進む教育方法が最善であると、ミルトンはその時代の教育改革論の一般的傾向に従って論じているのである。『教育論』において、彼は具体から抽象への段階教育、自然科学の重視、行為しつつ学ぶ態度、実社会との直結、外国語を知識獲得の手段として習得することなどを力説している。こうした点からすれば、ミルトンは当時のベイコンの実証精神およびコメニウスの近代教育改革の立場に立つ人といえよう。

ここでコメニウスの教育思想について触れておく必要がある。ポヘミアのプロテスタント教育家であるコメニウスによれば、人間は被造物の中の最高のもので、人間はこの世を永遠の国への準備期間と見て、自らを教育しなければならぬ。その教育には、学問、道徳、宗教の三分野があり、学校教育はこの三分野にわたっておこなわれるべきで、児童の家庭の貧富の差、知識の差、男女の差を問わずに施されるべきである。さらに彼は職業教育の重要性も強調している。コメニウスの斬新な教育思想は、彼の弟子サミュエル・ハートリブを通してイギリスにも紹介され、深い影響を与えたのである。コメニウスの思想がイギリスに根をおろした背景には、イギリス本土においてスコラ的教育観に反発する風潮が、すでに起こっていたという事実を考慮にいれる必要がある。たとえばベイコンは、学問の真の目的を人生の利益と効用に求め、学問は愛において完成されるべきものであると主張した。コメニウスもハートリブも、ベイコンの良き理解者であったのであり⁽¹⁶⁾、彼らの教育観とベイコンのそれとの間には、類似する点が多い。

ミルトンはハートリブには1643年に会うのであるが、『教育論』はハートリブによって、より現実的な一般教育改革を論ずるよう要請されたのである。またミルトン自身もこの時までには教師として、二人の甥と数人の生徒たちを四年間教えており、こうした実践を通して教育に関心があったことが裏付けられる。ヒルも『教育論』が「ミルトン自身の教育的実践の光」⁽¹⁷⁾であると述べていることから明らかである。ハートリブの要請によって書かれたにもかかわらず、ハートリブはこの論文を出版せず、ミルトンは自費で出版した。その理由はミルトンの教育論の内容がハートリブの期待するコメニウスのなものでなかったことによる。両者の共通点は当時のスコラ的教育への批判では一致し、学問、教育の合理主義的、経験主義的アプローチの面でも共通するものがあつた。しかしコメニウスにとって教育の対象は、社会的な、人間的な相違を越えての全児童を対象とする民主主義的な教育観といえるものであつた。それに対してミルトンの教育の対象は、貴族および上層市民の男子だけを対象とするエリートのための貴族的な教育観であつた。しかし、このことによってミルトンの教育観が前近代的な、非改革的なものだと断定することはできない。なぜならば、この貴族的とみえる教育方針の中に、自律的な、改革的な思想家の姿が浮かびあがってくるからである。コメニウスとミルトンの違いは、コメニウスが彼のカリキュラムから文芸教育を修辭学的な、誇張的な真理の敵として放逐し、文芸全体を蔑視できた⁽¹⁸⁾のに対して、ミルトンはスコラ主義的教育に反発し、当時の文芸の動向や文学教育に批判的であつたにもかかわらず、文芸そのものを放棄することができなかった点が両者の最大の相違点であ

り、この点にミルトンの教育観の特殊性と核心が潜んでいるわけである。

(3)

『教育論』の中でミルトンが教育の対象としているのは、貴族および上層市民の男子であることはすでに述べたとおりであるが、年齢的には12才から21才までの青少年で、彼らを寮に入れ、全人教育を施すことであった。ミルトンはこうした青少年たちを相手に実に多岐にわたる科目を課したが、このことはドナルド・クラークによれば、彼自身が聖ポール学校で受けた教育を踏まえ、また彼の教育活動において実践された内容のものである⁽¹⁹⁾。ここで重要なことは、文芸教育がカリキュラムの最終段階にいくことである。

では、ミルトンが12才から21才までの青少年を対象にしたカリキュラムおよび教授方法はいかなるものであったかを述べることにしたい。まずミルトンは教育課程を四段階に区分しているの、各段階ごとに教育内容をまとめ、諸特徴を分析していくことにする。

まず、第一段階では、ラテン語の文法と発音、学問や美德の養育に関する基礎的な書物の読解、数学、宗教などを具体的にあげている。ラテン文法に関しては、主要にして必要な規則から始めるべきであり、これを学習している間にラテン発音は、特に母音についてイタリア人に匹敵するくらい明瞭に訓練されるべきだとしている。次に大切なことは、「最も役に立つ文法事項にかれらを熟達させると同時に、早くから美德と真の労働を愛する人間に仕上げることが肝要であり、このためには彼らに簡単で楽しい教育的な本を与えてやる必要がある⁽²⁰⁾と指摘している。しかしながら、「この段階になって彼らの心を学問への熱意と美德賛美の情熱で燃やし、勇敢な人間、尊敬すべき愛国者になろう、神の愛を受けるにふさわしい者になろう、後世に名を残そうといった気高い希望によって奮起させ、従順の気持を起こさせて彼らを導いていくような講義や解釈をあらゆる機会に行なうためには、主要な技能と基礎学習で彼らを鍛えておくことが必要である。こうすることによって、彼らは男らしい紳士的な勉学の道に喜びを感じようになる⁽²¹⁾」というのである。まさにハンフォードのいうように、ミルトンの訓練の目的が「均整のとれた博識な紳士の形成⁽²²⁾」にあるといえよう。第一段階の終わりでミルトンは「語学、講読と同時に一日の一定時間、算数の規則を教え、その後、幾何学の原理を伝統的な方法で遊戯的に学ばせることができ、また夕食後から寝る時まで、宗教についての簡単な基礎を与え、聖書物語をしてやって、彼らの心を最も立派に養ってやる⁽²³⁾」ことが望ましいと指摘している。第一段階の教育内容はクリスチャン・ヒューマニストとしてのミルトンにふさわしい内容を表現している。

第二段階では農業、地理学、天文学、自然哲学、ギリシア語、三角法、築城法、建築学、土木学、航海術、気象学、鉱物学、動植物学、解剖学、医学、詩などをあげている。まず農業に関しては、カトー、ヴァルロおよびコルメラなど農学者の著作を読み、刺激を受け、自国の農法を改

善し、土壌を改良し、施肥を実行するよう技術の重視を指摘している。農業の次に地理学、天文学、自然哲学という順序でカリキュラムが構成されている。次にギリシア語があげられ、ラテン語学習の時と同じ方法で学び始めるならば文法上の問題は早期に解決され、アリストテレスやテオフラストスの系統的自然哲学書を読みこなし、知識を得ることが可能であることが述べられている⁽²⁴⁾。また、天文学および地理学の一般原理と自然科学の概要を習得すれば、数学の分野では三角法による計器学にはいり、それから築城法、建築学、土木学、航海術という個別分野にはいることが可能である。自然哲学の分野では、ゆっくりと気象学、鉱物学、動植物学、生体から解剖学にいたるまで組織的に勉強できるようになり、こうして体質、体液、健康に及ぼす気候の影響、気質上の欠陥を癒す方法を知ることができるとしている。ミルトンは自然および数学に関するこれら全ての学科目を進めていく際、必要に応じて狩人、鳥撃ち、漁師、羊飼、庭師たちの経験を実際に活用しなければならないし、またその他の分野、すなわち建築家、技師、船員、解剖学者たちの経験にも進むべきことを強調している。これらの人々は報酬を期待するからにせよ、あるいは将来性のある教授内容に賛成するからにせよ、進んでやってくれることは疑いがないから、このような方法によって彼らは自然科学上の知識と、その実践を一生身についたものとし、それらを忘れるどころか喜びをもって日々増大させるというわけである⁽²⁵⁾。さらに、「現在最も難解とされている詩人たち、オルフェウス、ヘシオドス、テオクリトス、アラトスなどラテン詩人のルクレーティウス、マニリウスとベルギリウスの田園牧歌詩などが容易で楽しいものとなる」⁽²⁶⁾と述べている。ミルトンがこれらの異教詩人たちをなんら危険の警告なしに教材として推薦したのは、当時の支配的な教育改革論者の原則と異なり、彼の人文精神の確かさを物語っているといえよう。第二段階を通じて、ミルトンが教育内容の学習にあたって古典古代の著作をその土台にしている点が特徴である。

第三段階では、倫理学、経済学、政治学、法律、神学、ヘブライ語、古代および近世教会史、歴史物語、英雄詩、ギリシア悲劇などをあげている。ミルトンはこの段階まで来ると、「彼らは年月と一般教育のおかげで倫理学において善悪の選択という理性行為が以前より一層はっきりできるようになっており、自分の判断によって道徳的善悪について考えることが可能だから、ここで要求されるのは彼らの道徳を堅固にしておくために、健全な教育を絶え間なく強くし、広く善を知り、悪を憎むよう教えこむこと」⁽²⁷⁾を力説する。さらにこの期間を通じてプラトン、クセノフォン、キケロ、プルタルコス、ラエルティオスおよびティマイオスなどの道徳的な作品の全てにわたって、彼らの若くて柔軟な感情が導かれるが、しかし、夜の勉強ではダビデ、ソロモン、福音書および使徒の働きなどの明確な教えに戻って一日の勉強を終わるようにしなければならないと主張している⁽²⁸⁾。倫理学や聖書の学びをミルトンがいかに重視したかが理解される。次に、私人関係の義務を完全に知るには経済学の勉強をするのが適切であるとしている。また政治学については、政治諸団体の起源、目的および理由を知ることにより、彼らは共和国の危機に際して

国家の揺ぎない柱となることが可能であるとする。法律に関しては、モーセによって初めて行なわれた最も保証あるものから、ついでリクルゴス、ソロン、ザレウコス、カロンダスなどのすぐれたギリシアの立法者の残存著書、さらにローマの諸布告、十二表法およびユスティニヤヌス法典に進み、イギリスのサクソン法、慣習法および成文法にまでいくが、これらの研究はあくまでも慎重に行なわれねばならないと警告している⁽²⁹⁾。また、毎夕および毎日曜日には、神学と古代および近世教会史の最も重要なところを十分理解できるように教えるべきだとしている。それゆえ、この時までには時間を決めてヘブライ語の習得が成されているようにし、現段階では聖書が原文で読めるようになっており、それにアラム語とシリア語を加えることも可能だとする。以上の課題がすべてうまく遂行されれば、精選された歴史物語、英雄詩および壮大な雄弁場面のあるギリシア悲劇、それにすべての有名な政治演説を彼らに与えることができるというわけである。これは単に読まれるだけでなく、ところによっては暗記され、教えられた通りに正しいアクセントで優美に、また厳正に発音されれば、彼らはデモステネス、キケロ、エウリピデス、ソポクレスの精神と活力でさえ自分のものとするができることを強調している⁽³⁰⁾。

第四段階では作文、演説、論理学、修辞学、詩学などとなっている。この段階は最終段階であり、まず彼らと一緒に文学作品を読むことによって彼らの話し方、書き方が明快で優雅なものになり、高位、中位、下位のスタイルそれぞれに応じて発表できるようになることをあげている⁽³¹⁾。だからこの課程に倫理学が有益である限りにおいて正しく適用され、テーマと論証を正確に表現する訓練を課すべきだとしている。そうすれば「論理学は握った拳を開き、プラトン、アリストテレス、ファレリウス、キケロ、ヘルモゲネス、ロンギノスなどの規則から出てくる優美で華麗な修辞学に到達する時期になる」⁽³²⁾というのである。次に詩学がくるが、微妙であるというより、もっと卒直で感覚的、情熱的な性質からいえば修辞学より前にくるものだと論じている。ミルトンにとっては、詩学は教育上のカリキュラムからいえば修辞学より後にくるものであるが、その内的価値から考えると修辞学に先行するものだというわけである。また、ここで意味している詩とは、「初歩文法の段階ではなく、アリストテレスの『詩学』やホラティウスにおいて、またカステルベトロ、タッソー、マッツォニその他のイタリア人の註釈書の中で、真の叙事詩、劇詩、抒情詩の法則とは何か、また傑作が守られねばならない文章作法とは何かを教える最高の芸術のこと」⁽³³⁾を指している。このことはやがて彼らに当代の詩人、劇作家連中がどんなに軽蔑に値する人間であるかを知らせ、神のことに人間のことにも、詩がどんなに宗教的な効用を持つか、どんなに栄光に満ち、崇高な用途を持つものであるかを彼らに教示することを可能にするのでありと力説している。さらに、ここに至って初めて、彼らをすぐれた内容を有する有能な作家に養成する時期がくるのであり、この段階では彼らは書物の普遍の本質を見抜く洞察力を身につけ、国会や市会で演説する彼らの唇には名誉と配慮が伴い、説教壇上においても、われわれがじっとすわっているのが我慢できないような説教とは違った表情、動作および内容が作り出

されることを論じている⁽³⁴⁾。このほかミルトンは体育を重視しており、午前中の一時間半ぐらいを剣道、レスリングなどにあてるべきだと言っている。また体育の時間の合間や食事前の休憩時間などに、彼らの疲労した心を楽しませ、静めるために、厳そかで神聖な音楽を流してやることは彼らに有益でもあり、快いことでもあると述べている。しかも音楽は食後にも適していて消化を助け、快い調べと満足感のうちに彼らの気持を再び勉強に向かわせるものであると言うのである⁽³⁵⁾。

第四段階で特に注目すべきことは、文芸教育が最終段階にくることである。このことは、文芸教育があらゆる教育の頂点と考えられていたことを示している。ミルトンが文芸教育に取りあげたものは、叙事詩を中心にした詩文学である。彼があげているジャンルは叙事詩、劇詩、抒情詩であるが、『教会統治の理由』の中での説明によれば、劇詩の分野で彼が考えているのは、ピンダロスなどの古典抒情詩を別にすれば、聖書の「詩篇」なのである⁽³⁶⁾。こういう区分のしかたはこの時代においては、かなり一般的なものであったらしく、ジョージ・パトナムは、この三分野を一括して「高い型」「high style」として、全文芸ジャンルの最高位においている⁽³⁷⁾。これをみても、ミルトンが考えていた文芸が当時として考えうる最高の質であったことがうかがえるのである。ミルトンは「高い型」に属する詩文学のもつ効用を「美德」をはぐくみ、「心の乱れ」を静め、「神の栄光」をたたえ、キリストに敵対するものと勇敢に戦った「殉教者の苦しみ」をうたい、国々が神を敬う道からはずれている現状を嘆くことによって、「あらゆる機会をとらえて国民を教育し、向上させること」であるという⁽³⁸⁾。ここには叙事詩人を目指すミルトンの使命感が感じられる。「高い型」の詩文学を愛好し、自ら叙事詩人を目指す彼が、自らヒロイックな生きかたを送ろうと努めたことは、『スメクティムニューアス弁明』*An Apology for Smectymnuus* (1642年)の中で「気高い事柄をうたおうと志すものは、自ら真の詩そのものにならない⁽³⁹⁾」という一節をみれば明らかである。

ミルトンは、教育の最初の段階ではラテン語の初級文法を始めることと教養書を読むことを必要と考えているが、この初期の段階においてさえ、彼の教育目標は、青少年たちに従順であることを教え、熱心に学ぶことと、美德を敬う精神を養い育てることであり、勇敢な人間、国を愛する人間、神に愛され、後世に名を残す人物になるという高い望みを抱かせることであった。ここで「美德」といわれるものは、「勇敢な」生き方を志向させる実践的徳である。彼にとって、学問の目的や教育目標を達成するためには、ヒロイックな実践的美徳を身につける必要があった。『教会統治の理由』にみられる表現に従うならば、「心はあらゆる美德の中でヒロイックでなければならない⁽⁴⁰⁾」ということであった。従って、ミルトンが『教育論』の最後の段階に文芸、とくに「高い型」の詩文学による教育を据えたことは、ヒロイックな生き方を教育の最終目標と考え、これを青少年たちに徹底させようとしたのである。

(4)

われわれはミルトンの論ずる教育課程がいかに実際的なものであり、さらに大胆で総合的なカリキュラムに基づく近代教育改革であるかを上記の詳細な教育内容の中でみてきた。まさにミルトンの教育観は、具体から抽象的観念へと進む段階教育、古典古代の著作を土台にし、広く自然科学を認めた教育であり、聖書や文芸教育を重んじ、道徳的判断と意志の訓練を重視したカリキュラムであり、一般教養と完全な幅広い教育を目標にしたジェントルマンのための人文主義的教育であったのである。結論として、ミルトンの教育観は、「キリスト教的教育観」と「古典的教育観」の融合であり、ヒロイックな実践的な美德を身につけた生き方を教育の最終目標とし、青少年たちに徹底させたところに彼の教育観の特色が出ていると言えるのである。

注

- (1) David Daiches, *Milton* (New York, 1966), p. 120.
- (2) J. H. Hanford, *A Milton Handbook* (New York, 1961), p. 94.
- (3) Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century* (Oxford Univ. Press, 1962) p. 395.
- (4) *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. II, pp. 366-367.
- (5) *Ibid.*, Vol. I, p. 854.
- (6) *Ibid.*, Vol. II, p. 377-379.
- (7) *Ibid.*, p. 379.
- (8) Leland W. Miles, *John Colet and the Platonic Tradition* (Lasalle, 1961), p. 25.
- (9) Oliver M. Ainsworth, *Milton on Education* (New Haven, 1928), pp. 42-44.
- (10) Richard L. Greaves, *The Puritan Revolution and Educational Thought* (New Brunswick, 1969) p. 40.
- (11) *Complete Prose Works*, Vol. II, p. 369.
- (12) *Ibid.*, pp. 370-371.
- (13) *Ibid.*, p. 374.
- (14) *Ibid.*, p. 374.
- (15) *Ibid.*, p. 374.
- (16) David Masson, *The Life of John Milton* (London, 1859-1894), Vol. III, pp. 212-215.
- (17) Christopher Hill, *Milton and the English Revolution* (Faber & Faber, 1977), p. 149.
- (18) *Complete Prose Works*, Vol. II, p. 192.
- (19) Donald L. Clark, *John Milton at St. Paul's School* (New York, 1948), p. 74.
- (20) *Complete Prose Works*, Vol. II, p. 383.
- (21) *Ibid.*, pp. 384-385.
- (22) Hanford, *op. cit.*, p. 95.
- (23) *Complete Prose Works*, Vol. II, pp. 385-387.
- (24) *Ibid.*, p. 390.
- (25) *Ibid.*, pp. 393-394.
- (26) *Ibid.*, pp. 394-396.

- (27) *Ibid.*, p. 396.
- (28) *Ibid.*, pp. 396-397.
- (29) *Ibid.*, pp. 398-399.
- (30) *Ibid.*, pp. 400-401.
- (31) *Ibid.*, p. 401.
- (32) *Ibid.*, pp. 402-403.
- (33) *Ibid.*, pp. 404-405.
- (34) *Ibid.*, p. 406.
- (35) *Ibid.*, pp. 409-411.
- (36) *Ibid.*, Vol. I, p. 815.
- (37) G. Gregory Smith, *Elizabethan Critical Essays* (Oxford, 1904), II, 158.
- (38) *Complete Prose Works*, Vol. II, pp. 384-385.
- (39) *Ibid.*, Vol. I, p. 890.
- (40) *Ibid.*, p. 753.